「山々のブログ」　　NO. １７２

県連盟の行方

後藤隆徳

かつて１０００名の会員を擁した静岡県連だが、来期は４５０名を切る模様だ。山岳組織の会員減は、労山全国連盟・日本山岳会もしかりで、とどまるところを知らない。
会員減の大きな要因は、傘下団体の連盟脱退である。連盟の大きな脱退は、２０１２年＝２５名、２０１４年＝１６＋１１名、２０１５年＝３６名、２０１６年＝１９名、２０１８年＝３５名、２０１９年＝４１名。（人数は前年度登録人数）ざっと数えて、ここ７年で約２００名弱。驚くべき数字である。
では何故、「脱退・離脱」なのか。よく聞かれるのが「労山に入っていてもメリットがない」だ。連盟の「メリット」とは一体何か。一般的に、「ある物事を行なって生じる利益、得るもの、見返り」とある。ここでいう「ある物事」とは、連盟費である。全ての人ではないものの、「物事の良し・悪し、やる・やらないの判断」を、「損・徳」ではかる人がいる。つまり高額な連盟費の割に、「メリット・見返り」がないということだ。

例えば連盟費は、年間２５２０円。５０名在籍する会は、１２万６千円の高額になる。会がその金額を連盟に納めるに、「高額で特にメリットがないものの、まあ何とか、納得できる」と考えれば問題はない。ところが、「メリットがなく、無駄金でとても納得できるものでない」と思えば、「辞めよう、脱退しよう」に傾いていく。

ただ、一口に「メリット・見返り」というが、「目に見えるもの・見えないもの」がある。目に見える講習会や講演会は分かりやすいが実は、目に見えない有益なものが多くある。目に見えないもは分かりにくく、「損得勘定の対象になり易い」。しかし、そもそも連盟に対して、それほど「メリット・見返り」を求めるものなのか。
私が登山を始めた５０年前は、車はない、（ホームゲレンデの丹沢はＳＬで行った。ホント）、金はない、情報はない、知識はない、技術はない、保険はない、そして仲間もなかった。従って当然、仲間が集い力を結集し、助け合い山に上った。その役割が、山岳会・連盟だった。

「一人一人の登山者の力は無力だ。力がない登山者が力を合わせ、登山環境を整え、よりよい登山が続けられるよう運動（活動・行動）しよう」という、大きな目的が山岳会・連盟にはある。それはつまり「労山趣意書」である。「労山趣意書」を礎に全ての登山者が結集し力を合わせる。それが労山の山岳会・連盟の運動である。
「メリット・見返り」は、趣意書を理解し運動することで、結果的に生まれるものである。労山は５０年以上、その志で前進して来た。そして、それは、「決して他人から与えられるものでなく、自身の、会の、組織の、運動で得るもの」である。

２０２０．０１．１３